

人物で語る 日本デンマーク

⑮

杉浦彦次

杉浦彦次は、一八八〇年（明治一三年）三月、彦蔵の長男として福釜町で生まれた。幼少のころから実直で、向学心も人一倍強かったと言われている。

彦次は十七、八歳のころ、福釜の西岸寺住職松林了観宅で、二年間漢学の指導を受けた。また、時々寺を訪れては、農村社会の状況や農家経済について教えを受けたり、報徳社（二宮尊徳の思想を実現しようとする団体）の活動について学んだりした。彦次は、了観を人生の師として仰ぎ、人間形成に大きな影響を受けたという。また、彦次宅のすぐ南に杉浦源右工門宅があり、継年期運動（新開地などにかかけられる税を延期してもらう運動）に没頭する源右工門の姿を目の当たりにして青年時代を過ごした。

このような環境の中で、彦次の心に火をつけたのが、一九〇〇年（明治三三年）九月に施行された産業組合法の成立であった。彦次は、品川弥二郎・平田東助共著の『信用組合

提要』や『信用組合論』を熟読した。その中で、農村の窮状を救うには組織化・協同化が必要なこと、特に農村の金融機関として信用組合設立の重要性を確信したという。彦次が、農村社会の発展に一石を投じようと決心したのはこのころである。

彦次が自分の考えを了観に話したところ、了観はすぐに賛同し、了観は機会あるごとに農民に協同化の必要性を説明したが、その機運は高まらなかった。了観は、村内の青年たちには勤儉を勧めたり郵便貯金を奨励したりした。

一九〇七年（明治四〇年）十月、了観や彦次ら有力者の尽力もあって、福釜の五十石、本郷、新田の三部落に報恩社が設立された。了観は顧問となり、彦次らは率先して、報恩社の活動を推進した。

この活動を通して、信用組合設立の機運が高まり、一九〇九年（明治四二年）二月、報恩社を解消して福釜信用組合が設立され、彦次は推されて初代組合長になった。以後、彦次は一九三七年（昭和十二年）六月に没するまで、二八年余にわたって組合長を務めた。当初は信用事業だけであったが、購買、販売、利用と事業を拡大させた。彦次の組合経営は非常に堅実で、農民からも信頼されていたという。

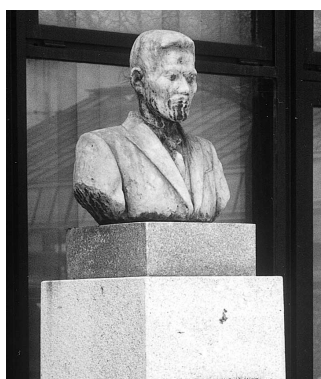
この間、彦次は、一九一二年（明治四五年）産業組合碧海郡部会を組織し、一九一五年

（大正四年）には、碧海郡購買販売組合連合会に改組して、初代、三代の会長として十三年間務めた。さらに一九一八年（大正七年）、尾三信用組合連合会の設立に参画し、一九二四年（大正一三年）、愛知県信用組合連合会に改組後も常務理事として、終生その発展に尽力した。

また、彦次は、全国的な組織の設立にも積極的に参画し、一九二三年（大正一二年）から七年間、全国購買組合連合会の理事として、一九二四年（大正一三年）から六年間、産業組合中央金庫総代として組織の確立と発展に力量を発揮した。

彦次は、生涯を組合活動に打ち込み、指導力や実行力を発揮し、経営手腕は高い評価を受けた。

一九六三年（昭和三八年）四月、安城市農業協同組合の設立を機に、福釜農業協同組合



釜支店の正面にあり、支店に来る人々を温かいまなざしで見つめている。

文 稲垣維晃

の礎を築き
発展させた
功績をたた
え、同年八
月に胸像が
造られた。
現在JAあ
いち中央福